第24号
月1回発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲720-1

綱領

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（八）（大和世界の建設）

古事記

宇宙の創始

「０（零）」のとき

竹葉　秀雄

「一」を「はじめ」とする以前、初めなき初めのとき、拡がりなき拡がりのところ。「本来東西無し、何処に南北あらん」の「北も一」も未だ生ぜざるところ、その「はじめ（太安麻侶は『はじめ』に『初発』と漢字を当てているが、この漢字に捉われないで、大和言葉で考えねばならぬ。）」である。宇宙の根元であり大本である。その世界は「０」である。その「０」である。古事記の「次に国稚かく浮きあぶらの如くにして、水母なすただよえる時に、葦牙のごと萌え騰る物に因りて、成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遅神」、この世界が、「一」の「はじめ」であり、これ以前の造化三神の世界である。日本書紀の本文の首は「古え天地未だ剖れず、陰陽分れざるとき、渾沌たること鶏子の如く、溟涬りて牙を含めり。其の清み陽かなる者は、薄靡きて天と為り、重く濁れる者は、淹滞りて地と為るに及びて、精しく妙なるが合えるは摶ぎ易く、重く濁れるが凝れるは竭まり難し。故れ、天先ず成りて、地後に定まる。然して後神聖その中に生れます。」と書き出してある。この「牙」を含まない以前である。（この一文は日本書紀の序文と見るべきところで、この序文は、准南子の「天地未剖、陰陽未判、四時未分、万物未生」の語、三五略紀の「天地渾沌如鶏子、盤石生其中」などの文、春秋緯にある「溟涬而含牙」の語、また清陽云々より以下、地後定までは、前准南子天文訓そのままの文にあるので、これらのものを合せて序文とされたものであるといわれ、日本の古伝は、その次の「故れ曰く、開闢る初め、云々」からであるが、日本書紀は国土の成れる事を基礎として書かれているのであるから、先ず国土に関係ある神、国常立尊以下の神々から記せられている。それ以前は古事記によらねばならない。）

数学上に於ける零の発見はインドの天才達によってなされたといわれる。これは大した発見であったと思う。これなくて現代の数学の発達ひいては絢爛たる文明は成されなかったであろう。インドに於ては既に六世紀のころ位取り記数法が行われていたのではないかと推定されている。七世紀の初めごろのインドの数学者ブラーマグプタの書物には、

いかなる数に零を乗じても結果はつねに零である。

いかなる数に零を加減してもその数の値に変化がおこらないこと。

すなわち、今日の記号にしたがえば、

$\alpha\times0=0, \alpha+0=\alpha, \alpha-0=\alpha$

とあらわされるべき零の性質が記載されているということである。（零の発見より）

零を「絶対無」と考える以上、或る数に零を加えてもその数はそのまま $\alpha+0=\alpha$ であり、零に或る数を加えれば加えた数そのまま $0+\alpha=\alpha$ である。―零の加法。或る数から零を引き去ってもその数はそのまま $\alpha-0=\alpha$ であり、零から或る数を引き去ること $0-\alpha=$ はあり得ない（負を考えない場合）。―零の減法。或る数を零倍すること $\alpha\times0=$ はあり得ない（計算上には用いられる）し、零を何倍しても零 $0\times\alpha=0$ である。―零の乗法。或る数を零で分割すること $\alpha\div0=$ あり

得ないことであり、零を如何に分割しても 0÷α=0 であり、あり得ないことである。—零の除法。

0はこの様に虚しく空なるものである。加えることも減ずることも、乗ずることも除することも出来ないものである。見ることも嗅ぐことも聞くことも味うことも触れることも出来ない世界である。

第三章　農民生活の倫理的考察

菅原　兵治

～第一節　文質原理より見たる農民の諸態度～

偏屈せる諸態度

然し近代の西洋流の偏知的教育によって養われて来た現代農村人の間に之を求むることは、或は濱の真砂の中より黄金の一粒を拾うより更に難いことである。其の多くの者は文質何れかに偏して、道を離れること遠い。左に其の諸種の態度を分類列挙して正を得るの参考とすることとする。先ず便宜上之を表解して見よう。——勿論分類はして見たもののこは己を見、人を見るの参考であって、生きた人間は必ずしもそう機械的に厳密に分類し尽し得るものではないのである。故に之は寧ろ自己の態度を検する資料として見る処に最も意義あるものとしたい。

文質関係より見たる農民の態度

- 浮文=売名的態度
  - 売名（若しくは求利）の為に、農道の本義より逸脱してまでも外飾的誇示をなすもの。
- 文に過ぎたる者
  - 知的=巧言的態度
    - 農業の技術的方面なり、農村の社会的問題なりを、只管に理論的に考究し、巧言して得々たるもの。
  - 情的=嘆美的態度
    - 浮浅なる感傷的態度を以て、農村の生活をさながら天上の楽園の如く讃美せんとするもの。（逃避的態度に陥り易し）
- ○彊義的態度……老農的態度
- 質に偏せる者=無自覚的態度
  - 社会の現状も、農事の進歩も知ることなく、唯「便利なる労役者」として働いているもの。（農奴的態度といわんか）
- 瀆武=騒激的態度
  - 社会の不合理、農民の不遇に焦憤し、其の打開改革の為に、農道の本義より逸脱して狂奔するもの。

右の中、文質彬々たる彊義的態度に就いては已に説述した処であるから之を省略し、其他の諸態度に就いて一通りの説明を加うることとする。

造化の妙用は飽くまでも文質彬々たる処にあるのであるが、実際に於ては兎角何れか一方に偏し易いものである。「文、質に勝てば則ち史なり。質、文に勝てば則ち野なり。——論語雍也篇——」で、「史」か「野」か何れかに偏することを免れぬ。其の質に偏して「野」の傾向を多分に有するのが無自覚的態度である。便利なる労役者としてよく働くことは働くが、畢竟使われるに重宝な人間であって「器」の

域を脱し得ない。而して更に之が外れて一種の病的状態に陥ると遂に騒激的態度に至る。私共は右翼左翼の所謂「闘士」的人物の行動に於て之を見得るであろう。

次に文的方面に偏せる者を見る。文に偏せる者を更に二つに分って見得るであろう。一は知に偏せる者にして巧言的態度であり、一は情に偏せる者で嘆美的態度である。其の大体の説明は前表に記述して置いたから之を省略し、猶詳しくは次の批判の項に於て之を述べたいと思うが、両者共何れも農道生活の「質」たる彊き実行力よりも、其の「文」たる説示的態度を好み而して気骨無く所謂文弱の傾向を有つ。而して此の態度が病的に高じて来て、実行を他処にして売名的偽飾的宣伝に狂奔するようになると、ついに浮文の売名的態度に堕するようになる。「文、質に勝てば則ち史なり」――「史」は書き役のこと。自分は実地の事―戦争なら戦争の実地に臨まずして、其の記録をなすものをいうのであるが、以上「文」に偏せる諸態度は確かに此の意味に於て「史」的傾向を有つものである。

文、質に勝てば則ち史なり、
質、文に勝てば則ち野なり、
文質彬々として然る後君子なり。

之を農道生活の態度に即して考慮して見ても実に生き生きとした教訓として理趣津々たるものがある。

言霊の力

三浦　夏南

妻の実家に帰ると親族揃って仏壇の前に座り、南無阿弥陀仏を唱えることが習慣となっている。私の家は父母ともに臨済宗であったので、仏壇に手を合わせることはあっても念仏を皆で唱えるという習慣はなかったので毎回新鮮な感じを受ける。大学時代から神道、儒教に関しては強い関心を持ち勉強を続けてきたが、仏教に対しては何故か食わず嫌い的な苦手意識があり、あまり積極的に学んで来なかった。江戸時代の国学者達や崎門学、垂加神道の先哲達が激しい口調で仏教批判を繰り広げることも少なからず影響して居り、本を重んじ、国粋に回帰したいという内なる念願から、仏教を印度の異教としてしか見ていなかった嫌いがある。しかし冷静に考えて見れば、仏教は古くから我が国に伝わり、我が国の伝統に洗練されて来た歴史がある。妻の実家で念仏を唱える度に心地良い感じがするのも、仏教が日本化し、日本の宗教となって居る為であろう。とりわけ念仏の如く聖語を繰り返し繰り返し念じ唱えることは我が国の言霊の伝統に適った日本人らしい修行であるように思う。確か神道者の川面凡児翁が言われていたように記憶しているが、我が国の仏教で念仏やお題目を主とする宗派が大衆に受け入られ、永く信仰されるに至ったのは、言霊を信仰し、神の言葉を繰り返し唱えることを古代より習慣としてきた我が国の伝統が先に存在したからで、決してその逆ではないといった主旨のことが書かれていた。念仏が自然と自分の中に入って来るのは念仏の素晴らしさもあるが、やはり我々内に流れる言霊信仰がそうさせるのではなかろうか。

コロナウイルスの脅威が連日マスコミによって報じられ、危機感が煽られているが、悪いイメージ、印象が心の奥底、潜在意識にまで深く刷り込まれると、人は自ら不幸、不運を招き入れてしまうように出来ている。聖語を繰り返し唱えることは我々の心の奥にある深層心理を禊祓い、神のままなる神性を発現させてくれるのである。コロナウイルスは氷山の一角に過ぎず、これからますます世は混沌への道を進んで行くであろうが、渾沌に対して恐怖し、批判し、諦めるものは混沌に呑まれ破滅の道を辿るよりほかない。渾沌に対して勇気を持ち、好機と捉え、修理固

成の悦びを感ずるものは混沌の中に新局面を切り開いて新世界の建設に加わる事が出来る。我々は常に後者の道を選びたい。その為には現象を超越した祈りによって心を聖化することが不可欠である。

今までに考えられてきた如何なる手段もこれからの世界には通用しないであろう。それらは全てこれまでの仕組み、構造の中で生み出されて来た手段であるからだ。これからは新たな構造を創造するものだけが、生存し行く世界である。その一段階として我々は帰農の道を選び、更なる進展の為新たな試みも進めつつある。新たな道に進み入るには心の奥にある思い込みの想念を一掃しなければならない。心の中の古い思い込みは躊躇や諦めを生み運命を停滞させてしまう。あらゆる常識を捨て去り、無限に変化して行く心を養うには、古来の言霊の力が大変有効であると思う。新たなステージへと歩を進めるに当って、根本にある心と言葉を浄化することを忘れないようにして行きたい。

とよくも農園だより

三浦　美恵

今月のとよくも農園では、ネギの手入れ・定植、春野菜の定植・播種、アスパラガスの手入れ、里芋の定植準備を行いました。

まずネギについてです。家から二十分程離れたハウスで育てているネギは、二日に一回水やりにいき、草引きをしたり換気をしたりして、こまめに様子を見に行っています。初めてのハウスで栽培するネギは、今までと水やりや換気の面で育て方が違い、戸惑うことが多いです。青果会社や周囲の詳しい人に聞きながら、なんとか収穫できるよう育てています。新たなネギも三月末に定植しました。これから暖かくなってくるので、ぐんぐん育ってほしいです。

続いて春野菜の播種・定植です。ジャガイモ、カブ、大根、人参、白菜、キャベツ、ブロッコリー、ケール、レタス、トウモロコシ、枝豆を植えました。暖かくなる三月下旬までは初めてのトンネル栽培に挑戦し、その中で育てていましたが、暖かくなってきたのでトンネルをはずし、露地栽培に切り替えました。暖かな日差しの中での定植中、三浦家の二人の子どもは走り回ったり、土を触って見たり、花をつついてみたりと気持ちよさそうでした。いつかはこの子達が中心になって農業をすると思うと楽しみです。

また、アスパラガスの成長には目を見張るものがあります。一カ月程前までは膝丈だった株が、大きいものでは胸辺りまで伸び、青々とした葉は心地よさそうにそよ風に揺られています。冬には全く芽が出ず、死んでしまったかに見えたアスパラ

ガスがぐんぐんと成長していく様子をみて、生命力の強さに感動しました。株が倒れないよう、支えとしてネットを張りました。暖かくなると虫も活動を始めるため、虫がつかないよう見回りをし、元気に育つことを祈ります。

最後に里芋についてです。順調に定植できるよう、種芋や移植機、マルチを購入し、土づくりを行って準備を進めて来ました。しかし今年の主力となる予定の里芋には、機械で畝をたて、マルチを張ってくれるマルチャーがかかせません。来週にはそのマルチャーが届く予定なので、後は天気や畑の乾き具合、そして地域の水路工事のタイミングを見計らいながら、今月末にも始動する予定です。

暖かくなり、野菜も草も虫も成長・活動が著しくなってきました。収穫が終わり、お休みモードだったとよくも農園も、春の訪れとともに本格的に活動を始める時期になりました。今月も自然に感謝しながら、こつこつと農業に勤しみたいと思います。

★今後の予定

先日ご案内の通り、三、四月の勉強会は休止いたします。今後の予定に就いては、次号の月報にてお知らせいたします。

★一燈照隅　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

・一般会員　三千円
・賛助会員　一万円
・特別賛助会員　三万円
・支援会員　一万円